

#008 お天気雑記帳

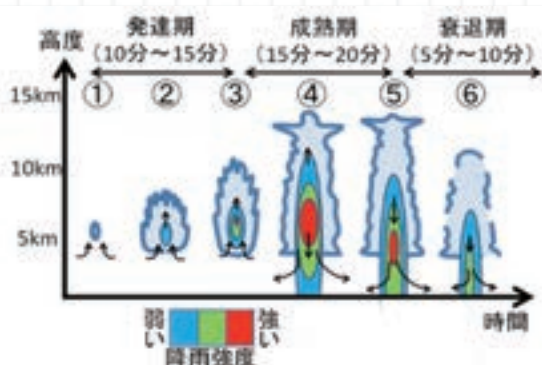
桶狭間

マスコミで頻繁に使われるようになった「ゲリラ豪雨」は、気象用語ではありません。お天気お姉さんが使うことはあっても、気象庁が正式の気象解説で使うことはありません。ウィキペディアに「予測が困難な、積乱雲の発生による突発的で局地的な豪雨を指す俗語」とありますので、夕立を激しくしたような雨をイメージしている人が多いのではないのでしょうか。

日差しの強いときや上空に強い寒気が流入したとき、地上付近の温度が上空よりも著しく高くなって大気が不安定になり、対流活動が強まり、「積乱雲」が発生します。積乱雲というと難しくなりますが、「入道雲」や「雷雲」と呼ばれている雲のことです。

積乱雲1個の寿命は約1時間と短く、大きさも直径10km程度です。発達期、上昇流の中で水蒸気が冷やされて直径0.01ミリの細かな水滴(または氷粒)ができます。成熟期になると、この水滴が強い上昇流の中で直径数ミリの程度に成長し、やがて、その重さを支えきれずに雨になって落ちてきます。そして、雨の落下によって下降流が発生します。積乱雲が近づいてくると、この下降流で地上付近の風が強まります。積乱雲から離れたところであれば、ひんやりとした心地良い風なのですが、積乱雲に近いところでは、強い風に雨も混じって、横なぐりの暴風雨になります。

動植物が小さな細胞から形作られているように、積乱雲がいくつも集まって、大きな積乱雲の塊を形成することがあります。こうなると、連続的に強い雨が降り、いわゆるゲリラ豪雨になります。



積乱雲の発生から衰退まで

永禄3年(1560年)5月19日の「桶狭間の戦い」のとき、ゲリラ豪雨になったと思われる記述があります。現在の暦に直すと6月22日ですから、梅雨の盛りの出来事です。この記述から、織田信長がひそかに今川義元に迫り、勢力で勝る今川勢を破った戦いの謎を解くことができます。

黒雲にわかにかに村立ち来って、大雨しきりに熱田の方よりふり来たり、石氷を投ぐるごとくに、敵勢へ降りかかり、霧海をたたえて暗かりければ、殊に寄する味方さへ、敵陣に近づくをも覚束なき程なれば、敵は會ってしらざりけるも理りなり

『甫庵信長記』

黒い雲が急に発達して、熱田神宮のある北西の方向から大雨が降ってきた。激しい勢いで今川勢に降りかかり、あたり一面に深い霧がかかって暗くなったので、攻めている織田勢でさえ敵陣に近づいたのがわからないほどであった。今川勢が織田勢の攻撃に気づかなかつたのも道理である。

敵味方がわからないような激しい雨。戦いがあった場所の近くの沓掛峠で突風が吹いたという記述もあり、桶狭間の雨が尋常でなかったことが推測されます。

杳懸の到下の松の本に、二かい・三かみの楠の木、雨に東へ降倒るる。

『信長公記』

杳懸の峠の松の近く、幹周りが二抱えも三抱えもあるような楠の大木が、暴風雨で東の方向に倒れた。

雨が降り始める直前、織田勢は今川勢が陣を構える山の近くに迫っていました。激しい雨が降り始めると、白くかすんでお互いの姿が見えない状態になり、しかも強い風で雨が目に入り、その場で雨が止むのを待つしかない状態になったのではないのでしょうか。近くに雨を避ける木があれば、その陰に避難したと思います。

織田勢は西、今川勢は東に位置していましたので、積乱雲の塊が偏西風に流されて東に移動すると、織田勢のほうが今川勢よりも少し早く雨が止みます。両軍の位置、積乱雲の移動速度によってその時間差が決まるのですが、数分、長くても10分程度ではなかったかと思います。雨が止んだ時、織田勢が急ぎ陣形を整えて攻撃を開始したとしたら、今川勢はまだ激しい雨の中か、あるいは雨が止んだばかり。そのため、攻撃に気づくのが遅れ、思うように反撃できなかったのではないのでしょうか。

空晴るるを御覧じ、信長鎧をおつ取て大音声を上げて、すはかかれかかれと仰せられ、黒煙立てて懸るを見て、水をまくるがごとく後ろへくはつと崩れたり

『信長公記』

信長は、雨が止んだのを見て、槍をとり「さあ、かかれ」と大声をあげた。今川勢は織田勢が泥を跳ねあげて攻めてくるのを見て、水を撒いたように陣が崩れて後退した。

気象予報士(株)富士ピー・エス顧問 松嶋 憲昭

著書「桶狭間は晴れ、のち豪雨でしょう」メディアファクトリー新書